

教員推薦図書 2023年11月

推薦教員	国際学科 教授 岡本 和彦 先生	【推薦コメント】 「自らが信じる「正義」のためならば、不正義を行ってもいいのだろうか。もしも、そうだととしても、悪を打ち倒すための不正義はどこまで許されるのか。」（朝日新聞『天声人語』2023年10月26日より引用）。10月7日の「ハマス」によるテロ攻撃に対するイスラエルの報復行動がパレスチナ「ガザ地区」の200万人を超す民衆の生命を極端に脅かしている。2022年2月に始まったロシアのウクライナ侵略戦争が古風な第一次世界大戦時にも似た陣地戦を示しつつ、「ハイブリッド戦争」とも言われる情報・心理戦その他の非正規な手法も伴い進行する様を目の当たりにして、まさか今の時代にこんな戦争が起こるなんてと多くの人が思ったことだろう。そうした中で再びパレスチナで衝撃的な戦闘が始まってしまった。 誰もが平和を求めているはずだ。なのにいつしか紛争はエスカレートし、戦闘が始まり、やがて虐殺（ジェノサイド）にまで至ってしまう。カンボジアで、旧ユーゴで、ルワンダで、そしてウクライナでもパレスチナでも。そこにはどのような「意識のメカニズム」が働いているのだろうか？「ホロコースト」の受難を経てイスラエルを建国したユダヤ人が、パレスチナ人に対してジェノサイドを行うことを正当化するメカニズムとは？ 本書はそうした疑問に一つの示唆を与えてくれる近未来軍事アクション SF 小説である。武装勢力の軍事顧問として紛争地を渡り歩くジョン・ポールなる人物が現れたところでは決まって虐殺が発生する。その危険人物の暗殺を指令された米国特殊部隊員を主人公に描かれた軍事小説である本書での戦闘場面は凄惨で、しかしウクライナやパレスチナの現実の戦闘をまるで予言していたかのようなようだ。ジョン・ポールはいかにして虐殺を呼び起こすのか。彼の言説（ナラティブ）が静かに徐々に人々の中の怒りと憎しみを沸騰させるのだが、ポイントは我々すべての人間のなかに「器官」としてそうしたメカニズムが備わっているとしたら…。彼はそれを発動させるスイッチを入れて回っているだけなのだ。今や言説だけでなく写真や動画が氾濫し、真偽のほどがわからぬ情報が容易に人々の意識を触発する。「器官」が反応し発動するのだとしたら分断と対立が煽られるのを止めることはもはやできないのか？癌のために34歳で早世し、オリジナル長編はわずか2冊しか残さなかった伊藤計劃による本書は、安全保障や平和と戦争に関心のある人のみならず、ディストピア化する現代社会を危惧する人にとっても必読の軍事 SF 小説である。
書名	虐殺器官 (ハヤカワ文庫)	
著者名	伊藤計劃 著	
出版社	早川書房	
請求記号	913.6 / Ito	
資料 ID	901099363	